

学生海外調査研究	
ヴァーツラフ・ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集	
氏名	佐藤 真知子
	比較社会文化学専攻
期間	2018 年 8 月 7 日～2018 年 8 月 23 日
場所	フランス（パリ）、アメリカ合衆国（ニューヨーク）
施設	フランス国会図書館、ニューヨーク公立図書館 リンカーン・センター内 上演芸術資料館

内容報告

1. はじめに

1.1 研究の概要

筆者は、20 世紀初頭に活躍したロシア人バレエダンサー・振付家である、ヴァーツラフ・ニジンスキー [Vaslav Nijinsky 1889?-1950] の振付家としての側面に注目して研究を行っている。

バレエは 20 世紀初頭に登場した、セルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュス [Les Ballets Russes de Sergei Diaghilev 1909-1929]（以下、バレエ・リュスと記す）の活躍によって、芸術として見なされるようになった。このロシアのバレエ団は、主にパリを中心に活動を行い、同時代の芸術家らを集結した作品創作により、音楽や美術といった諸芸術分野、さらにはファッションにも多大な影響を与えた。ニジンスキーはその初期に活躍した、男性バレエダンサー兼振付家である。

ニジンスキーは、卓越した技能を持つ花形男性舞踊手として一世を風靡したことで知られる。一方彼の振付は、脚の外旋や上昇志向といったバレエ特有の動きを廃した作品の創出を行い、そこには既存の概念にとらわれない、新しい舞踊を創造しようとする意識が見てとれる。

今日、ニジンスキーの振付作品は、バレエにてモダニズムが幕をあける契機となったと評される¹。しかしながら、振付家自身がどのような思想のもとに作品を創造したのかは、十分に研究がなされていない。ニジンスキーは自らの手記の中で、「新しい舞踊の理論を創造した」²と述べたり、インタビュー記事の中で自身の振付を「身振りの様式化の実験」³と称したりしていることから、彼は何らかの舞踊思想のようなものを持っていた可能性があると考えられる。筆者は博士論文にて、ニジンスキーが自身の舞踊作品の創作に際し、どのような考えを持ち、何を表現しようとしたのかという点を明らかにしたく研究を進めている。

1.2 本海外調査の必要性と目的

本海外調査では、博士論文の基盤となるニジンスキーに関わる一次資料、ならびに先行研究に関する資料の調査をおこなうことを最大の目的とした。具体的には、以下の資料の複写・閲覧をおこなった。

- (1) ニジンスキー自身の記した手記（全 4 冊のノートの中の第 4 冊目）
- (2) 新聞等に掲載されたニジンスキーのインタビュー記事
- (3) 先行研究関連資料

これらの資料の検討によって、ニジンスキーが自身の振付作品に関して、どのような考えを述べているかを検討したい。そして日本では入手が難しい先行研究関連資料も併せて調査・検討することで、自身の研究論文の方向性と独自性を明確にすることにもつなげたい。そのためにはフランス、ならびにアメリカ合衆国の両機関に所蔵がある、資料の収集が必要不可欠であった。

2. 調査の方法と対象

本調査では、以下の二つの機関を訪問した。両機関の詳細は以下の通りである。

2.1 フランス国会図書館 [Bibliothèque nationale de France]

フランス国会図書館は、パリを中心に 7 つの館で構成されるフランスの国会図書館であり、世界最大規模のアーカイブである。そこには、書籍をはじめとする印刷物、手稿、版画、写真、地図、楽譜、ビデオや音楽などの録音資料、コスチュームをはじめとする、膨大な資料が所蔵されている。今回は、フランス国会図書館のなかでも、リシュリユー館の音楽部門と舞台芸術部門、そしてオペラ座図書館・博物館を中心に、バレエ・リュス関連資料について調査をおこなった。

この機関では、事前にコレクション・カタログから調査リストを作成しておき、インターネット上から資料を予約する方法、ならびに現地で配布されている申請用紙にて資料請求を行う方法をとった。資料は原則、フラッシュなしの手持ちカメラによる撮影が許可されているものの、筆者が調査した資料のいくつかは、撮影自体が許可されていないものであった。そのためそのような資料については、手書きで書き写す方法をとった。

2.2 ニューヨーク公立図書館 上演芸術資料館 [Jerome Robbins Dance Division of the New York Public Library]

ニューヨーク公立図書館の上演芸術資料館は、1944年にニューヨーク公立図書館の独立した部門として設立された、世界最大規模のアーカイブである。場所はリンカーンセンター内にあり、メトロポリタン歌劇場やジュリアード音楽院などの芸術関連施設の立ち並ぶ一帯にある。この機関には、書籍をはじめとする印刷物、手稿、写真、楽譜、挿絵、ビデオや音楽などの録音資料をはじめとする、膨大なコレクションがある。

この機関についても、事前にコレクション内容から調査リストを作成しておき、現地で配布される申請用紙にて、資料請求を行うという方法をとった。また、資料はフラッシュ等を使用することは禁止であったが、手持ちによるカメラ撮影は許可された。今回は、ダンス部門の中でもスペシャル・コレクションに分類される、多くの貴重な資料について、閲覧・複写をすることができた。

3. 調査の内容とその成果

3.1 ニジンスキーの手記の調査（於フランス国会図書館 Bibliothèque nationale de France）

ニジンスキーはバレエ・リュスを離れた後の1918-19年にかけて、全4冊のノートからなる手記を記している。ニジンスキーの執筆物でまとまったものは現在、ほとんどこれらのノートに限られる。彼の手記は、すでに、英・仏・日の諸言語で翻訳出版されているが、ノートの原典にある全てのページが翻訳出版されているわけではない。筆者はこれまでも、ニジンスキーの第1冊目から第3冊目までのノートについて調査を行ってきたが、フランス国会図書館が所蔵する第4冊目のノートは未着手であった。今回は第4冊目のノートをマイクロフィルムで閲覧し、そこに何が書かれているかを確認した。さらにそのなかに、振付や舞踊について述べた部分がないか、内容の検討をおこなった。

まずこの第4冊目のノートは、数編の詩と数通の手紙で構成されている。ここに記載されている手紙については、実際に投函されたのかどうかはわからないとされる。現在邦訳出版されている書籍、『ニジンスキーの手記 完全版』（新書館、2013年）には、この第4冊目のノートのなかから、4通が選出されて掲載されている。実際に原典を参照すると、少なくともこの第4冊目のノートは、12通の手紙と、2編の詩で構成されていることを確認した。ノートは鉛筆、またはインクのペンが使用された、ニジンスキーの直筆で書かれており、言語はフランス語、ロシア語、ポーランド語が使われていた。内容をみると、このノートの前半は、受け取り手を意識した手紙の形態となっているものの、後半は宛名が書かれていても、同じ単語や短い文章が繰り返され、ほとんど詩のような様相を呈していた。手紙の宛名は、母親や、パリで活躍したポーランド出身のオペラ歌手のレシケ、仲間のダンサーのコストロフスキー、バレエ・リュスの興行師ディアギレフ、そしておそらくは音楽家のアーンや興行師のアストリュク宛てであろう手紙も確認した。そのほかは、「親愛なるマダム」「親愛なるムッシュ」というように、具体的な名前の挙げられていない手紙も複数あった。

内容については、手書き文字であることと、言語が複数に渡っているために分析は途中であるが、自身の近況や思っていることをしたため、また相手の無事を祈る手紙があると同時に、パリに戻り、また芸術家として仕事をするための人脈作りに関する手紙もあった。このノートが書かれた時期は、ニジンスキーがバレエ・リュスから解雇されたのちに、世界大戦勃発によるハンガリーでの軟禁生活を経て、中立国であるスイスのリゾート地であるサンモリッツに腰を落ち着けていた時期であった。第1冊目から第3冊目のノートには、戦前のキャリアを振り返ったり、自身の振付の思想のようなものについて述べたりする部分があるものの、第4冊目については、手紙という形態をとっていることから、自身の近況を報告し、今後いかに生きていくかを思案する様子をうかがうことができた。

3.2 ニジンスキーのインタビュー記事の調査（於ニューヨーク公立図書館 上演芸術資料館 Jerome Robbins Dance Division of the New York Public Library）

ニジンスキーは度々、新聞や雑誌のインタビューで、自身の振付作品について語っている。筆者はこれまでフランスやイギリスで発行されたインタビュー記事の調査をおこなってきた。今回はアメリカ合衆国、ならびにロシアで発行された記事を中心に記事の調査をおこなった。

3.2.1 “Nijinsky Box”

ニューヨーク公共図書館は、独自にまとめたニジンスキー関連資料を、“Nijinsky Box”として公開している。ここには年代別に分けられた、新聞・雑誌記事が大量におさめられていた。そのなかから、

ニジンスキーのインタビュー記事を中心に資料の検討を行ったところ、1920年代までの記事を集めたフォルダに、本人のインタビュー記事や、彼の発言を引用した記事を複数点、認めることができた。それらは英語、フランス語、ロシア語の記事であり、内容は、自身の振付作品に対するものや、彼が自分自身の役割について語った記事が含まれていた。特にここには、ニジンスキーの第4作目の振付作品である《ティル・オイレンシュピーゲル *Till Eulenspiegel*》に関する記事も散見された。この作品は、他の作品と異なり、初演がニューヨークでおこなわれ、その振付に関する資料もほとんど残されていないため、その作品の全貌はあまりよくわかっていない。そしてヨーロッパでは公演されていないために、舞台評の大部分がアメリカにあり、今回の調査で《ティル》に関する新聞記事や、先行研究を多く見つけることができた点は、大きな成果となった。さらにそれらの記事からは、この作品のニューヨーク公演における評価の高さが、改めて明らかになった。

なおこの *Nijinsky Box* には、かなりの数の記事がコレクションされていたため、滞在中に全ての資料の検討をおこなうことは出来なかった。しかしながら、資料は全て撮影し、データを持ち帰ることができた。特にこのコレクションのなかには、ニジンスキーが舞踊家として第一線を退いた後の1930年から、彼が亡くなる1950年までの間に発行された記事がかなり多くあった。この間は、筆者の研究対象としている時期からはずれるものの、いかにニジンスキーという芸術家が解釈され、時代に受容されていったかを探る鍵ともなりうるため、今後資料を読み込み、本人の言説以外の部分に関しても、情報収集に努めたい。

3.2.2 その他 NYPL の所蔵する新聞・雑誌記事の収集と閲覧

ニジンスキーのインタビュー記事は、他にも様々な新聞・雑誌に掲載されている。例えばアメリカ合衆国発行の新聞としては、音楽や劇場文化を主に扱った *Musical America* に、ロシアでは、ペテルブルクで発行された一般紙である *Petersburgskaia gazeta* や *Riech* といった新聞に掲載されているとの報告がある。これらの新聞は世界でも所蔵している施設が少なく、また所蔵していたとしてもその発行日が連続していない場合が多い。ニューヨーク公立図書館は、20世紀初頭に発行されたこれらの新聞のコレクションを持ち、発行日も連続して揃えられている。今回は、ニジンスキーが作品を発表した1912年から1916年にかけてのこの新聞の記事の調査をおこなうこととした。

まず *Musical America* については、ニジンスキーの《遊戯》に関する、パリの初演についての舞台評を見つけることができた。それと同時に、「ニジンスキーは彼の芸術を永続させるために本を書いている」と題された記事を見つけることができた。後者に注目すると、これは新聞の一面全てを使った大型の記事であり、小見出しとして、「舞踊を音楽のように明瞭に記録する手段の発明」といった文言が並ぶ。確かに彼は、ロシア帝室バレエ学校時代に習得したステパノフの舞踊記譜法を、独自に応用した記譜法を開発しており、それを用いて彼の第一作目の振付作品である《牧神の午後》(1912年)を書き残している。しかしその舞踊記譜法を体系化したり、書籍としてまとめたりしたようなものは、現在発見されていないと思われる。また手記のなかにもスコアが記されているが、こちらも部分的なものであることを確認している。この記事が発行された1916年は、彼が手記を書き始めるよりも前であることから、この記事で述べられているものが一体何であるのかについて、今後検討する必要がある。同時に、ニジンスキーは記譜法に関する探求を「ライフワーク」とも称しており、舞踊を譜面に書き残すことに大変なこだわりを見せている。なぜそこまで舞踊記譜法にこだわりをみせるのか、という点も、彼の舞踊観を探る上で大変重要な視点であると考えられる。当時の他の記譜法の流れと併せて、さらに分析・検討を進めていきたい。

次に *Petersburgskaia gazeta* については、ニジンスキーが自身の《牧神の午後》の作品について語った記事を、マイクロフィルムで閲覧することができた。しかしながら、ロシアの新聞によくあることであるが、記事の文字はインクが滲んでぼやけており、またマイクロフィルムの解像度も良くないことから、読み取れるのはタイトルや小見出しといった大文字の部分のみであり、その本文の内容はほとんど読み取ることはできなかった。そのためニューヨーク公共図書館の司書の方に、この記事が所蔵している他の施設を検索してもらったが、OPAC上では該当の記事を所蔵している施設を見つけることができなかった。そのため、そもそもOPACに反映されていない可能性のあるロシアの国会図書館、ならびに個人コレクション等を、今後、当たっていきいたいと考えている。

今回は1912年から1916年にかけての *Musical America*、*Petersburgskaia gazeta*、*Riech* といった新聞記事の調査を試み、数点のニジンスキー関連記事の閲覧・複写に成功した。しかしながら、記事は膨大であり、かつ作業時間がかなり限られていたために、これらの新聞のすべてを検討することはほとんど不可能であった。今回着手できなかった年代についての記事の検討は今後の課題にするとともに、複写に成功した記事については、その内容を詳細に検討し、分析を進めていきいたいと考えている。

3.3 先行研究資料の調査（於パリ、ニューヨーク）

ニジンスキーの振付作品は、数回上演されたのちにバレエ団のレパートリーから外れたために後世に残らなかったものが多い。しかしながらこれまで多くの舞踊研究者らが、様々な資料をもとに作品の復刻に取り組んできた。その結果、ニジンスキーの振付をおこなった4作品は全て復刻がなされた。今回は、ニジンスキー第2作目の振付作品《遊戯 *Jeux*》(1913年)と第4作目の《ティル・オイレンシュピーゲル *Till Eulenspiegel*》(1916年)について、これらの作品の復刻を手がけたアメリカの舞踊研究者 ミリセント・ホドソンらの研究資料を中心に、資料調査をおこなった。

3.3.1 《遊戯》復刻関連資料 (Millicent Hodson, *Nijinsky's Bloomsbury Ballet: Reconstruction of the Dance and Design*, New York: Pendragon Press, 2008. 他)

《遊戯》は、1913年にパリで初演を迎えたが、その後バレエ・リュスのレパートリーとして残らなかったために、作品は後世に受け継がれなかった。しかしながら、1990年代にホドソンらが復刻を試み、1996年にヴェローナ・バレエで、2001年にはローマ・オペラ・バレエとジョフリー・バレエで、そして2005年にはロンドン オクトーバー・ギャラリーで、復刻上演に成功した。ホドソンらは、ニジンスキーの振付作品の全4作品中、3作品の復刻を手がけている。そしてこの作品をどのように復刻したのかについては、書籍にまとめて出版されているものの、《遊戯》に関する書籍はかなり高額な値段で古書として出回っているために、入手が難しいものであった。フランス国会図書館、ならびにニューヨーク公共図書館はどちらもこの資料を所蔵していたため、閲覧ならびに複写をおこなうことができた。

まず、ホドソンによる《遊戯》復刻の研究書を参照し、どのような一次資料をもとに復刻が試みられたのかについて検討した。その結果、復刻に当たってはニジンスキーの構想したシナリオ、舞台写真と挿絵、そしてこの作品の作曲を手がけたクロード・ドビュッシーの楽譜、およびそこに記された作曲家、振付家双方のメモ書きを、主な資料としていることがわかった。復刻の主たる資料となっているメモ書き入りの楽譜は、ディアギレフが1929年に死去した後、セルジュ・リファールが所有していたが、1984年にサザビーズに売りに出されたという。そして2004年に、イェール大学がこの楽譜の写しをコレクションに加え、その著作権も得た。この作品の音楽や楽譜については、ホドソンらが着手するよりも前に、アメリカの音楽研究者であるマクギネスが博士論文のなかで扱っている⁴。マクギネスも記しているように、ドビュッシーの楽譜に記されたニジンスキーのメモ書きは、振付というよりも情景描写についての記述となっている⁵。そしてニジンスキーは、ほぼ間違いなく、必要な動きを構想していると考えられるものの、譜面上のメモにはその意向は記述されていない。そのため、作品の復刻に当たっては、チャールズ・ガーシェルの撮影した舞台写真、ならびにヴァランティヌ・グロスの描いたパステル画から、身体のパフォーマンスや動きを読み取って譜面に当てはめたり、当時発行された批評文を参考に、作品の全体像を検討したりする方法が取られている。そして時には、ニジンスキーの関わりのあったロダンの彫像作品や、ゴーギャンの絵画に見られる身体のパフォーマンスも参考に、ニジンスキーの構想したであろう振付の内実に迫ろうとしている。

筆者はこの資料を見る限り、振付の復刻は、復刻者の解釈に左右される部分が多いように感じられる。しかしながら、たとえ舞踊譜が残されていたとしても、過去の舞踊作品を100%の精度で現代に蘇らせることはほとんど不可能である⁶。そのことから、このような取り組みを研究書としてまとめていることは、次なる研究を進めるうえで大変有益である。今後は、振付家本人が残した言説などの他の視点からも検討を加え、振付家の《遊戯》の創作の意図に迫っていきたいと考えている。

3.3.2 《ティル・オイレンシュピーゲル》復刻関連資料

ニジンスキーの第4作目の振付作品である《ティル》も、ホドソンらが復刻を手がけている。今回の調査で、彼女らの復刻に関わる資料について調査をおこなったが、参考となる有力な資料は見つけることはできなかった。昨年度に、筆者は英国ロンドンでも資料調査をおこない、そこでホドソンらが作成した、《ティル》復刻に関わる資料を閲覧した。そこには、この作品の復刻にあたり、かなり多くの新聞記事の収集により、作品の手がかりを得ようと試みたと記されている⁷。この作品の曲は、リヒャルト・シュトラウスによるものであり、写真も数点残されている。しかしながら、振付に関しては未知の部分が多く、実際にどのような資料を用いて、ホドソンらがこの作品の内実に迫ろうとしたか、引き続き調査をおこなう必要がある。

3.4 その他

今回調査したなかでも興味深い資料の一つに、ニジンスキーの誕生日に関わる記事がある (Ian Ferguson, "Nijinsky's Birthday?" in *New York Times*, August 1983. ニューヨーク公共図書館所蔵)。バレエ史研究者の鈴木によれば、ニジンスキーの出生年は、「1889年3月12日 (旧暦2月28日。ただし1888年、1890年という説もある) に、ロシア (現在はウクライナ) のキエフで生まれた」とある⁸。このようなニジンスキーの出生年月日にかかわる様々な説を、取りまとめて考察したものが、

本資料である。

ここではまず、ニジンスキーの妻のロモラが、ニジンスキーの手記を出版した時の記述に焦点が当てられる。彼女はニジンスキーの誕生日について、一冊目の書籍には1890年2月28日と記しているものの、2冊目では同年の12月28日とし、生まれた月日が大幅に異なって紹介されている。一方、ニジンスキーの墓石には、誕生日が1889年12月28日というように、ロモラの記述よりも一年早く書かれていたり、スイスで治療を受けていた時の記録には1889年3月12日として3月生まれであると記されていたりすることを紹介する。最終的には著者のフェルグソンは、ニジンスキーがブエノスアイレスで結婚をする際に、1890年として自ら届けを出していることを根拠に、その年の生まれであると説を支持している。それとともに、旧暦と新暦の表示方法により、生まれた月日の表し方に差があることを指摘している。

この資料では同時に、ニジンスキーのロシア帝室バレエ学校の入学年、卒業年を、妹のプロニスラヴァをはじめとする同郷たちと比較し、ニジンスキーが通常よりも一年早く入学している可能性があること、そして卒業には人よりも一年多くかかったこと、母親がニジンスキーの洗礼式の日を誕生日として届け出た可能性のあることなどが記されている。筆者にとっては疑問に思うことが数点あるものの、ニジンスキーの生い立ちを知るうえで、興味深い資料となった。ニジンスキーの生い立ちについても、検討の上、博士論文で言及したいと考えている。

4. まとめと今後の課題

本調査は、移動日や施設の休館日を除いて実質10日間という短期間ではあったが、ニジンスキー本人のインタビュー記事を複数点収集することに成功したこと、そして日本では閲覧の難しかった先行研究資料を多数複写し検討することができた点で、実りある調査となった。

特に、ニジンスキーが舞踊記譜法について語った記事を見つけることができたことにより、なぜ彼がそこまで舞踊記譜法にこだわりをみせるのか、という疑問が浮かび上がったことは、ニジンスキーの舞踊観、あるいは身体観を探るうえで、重要な視座であろうことに気づかされた。今後は、そのような記譜法に対するニジンスキーのまなざしを探るとともに、本人が振付を手がけた《遊戯》、《テイル》などについて、先行研究をもとに創作の意図を探っていきたいと考えている。本調査で得られた資料群は、筆者の博士論文を執筆するにあたり必要不可欠なものであり、特に第3章、第4章、第5章で中心的な役割を果たすであろう。そしてその成果の一部は、今年度末に提出予定の、筆者の博士論文のなかで発表したいと考えている。

5. 謝辞

本調査を遂行するに当たり、ご指導をいただきました指導教員の猪崎弥生先生、ならびに準備段階からご協力ご助言いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

本調査は、国際的な女性リーダーの育成を旨とする、お茶の水女子大学「学生海外調査研究」プログラムの助成を受けて実現したものであり、現地に赴いての調査を必要とする本研究に対し、貴重な機会をいただきましたことに深く感謝いたします。

注

1. 例えばニジンスキーの振付の試みを、バレエにおけるモダニズムの先駆けであると紹介している資料には、以下のものがある。(クレイン & マックレル(2010), pp.354-355.)
2. ニジンスキー (鈴木訳) (2013), p.222.
3. *Gil Blas*, le 20 mai 1913.
4. McGinness (1996).
5. McGinness, (2005), p.558.
6. 身体の動きは複雑であるため、表記には限界がある。例えばニジンスキーの記譜法の土台となったステパノフの舞踊表記法は、頭部、胴体、脚などの部位ごとに音楽表記法で動きを示しており、なかばオーケストラ譜のようになっている。しかしそこでは細部が書かれているわけではなく、細部の必要性は予期されていないことが指摘されている。(Guest (1989), p.98.)
7. Compiled by Kenneth Archer and Millicent Hodson, "The truth about *Till Eulenspiegel*: Excerpts from the American Press, 1916-1917" in a collection at Victoria and Albert Museum Archive.
8. 鈴木晶(2013)「解説」『ニジンスキーの手記 完全版』, p.371.

参考文献

- デブラ・クレイン & ジュディス・マックレル (鈴木晶監訳) (2010) 『オックスフォード バレエ ダンス事典』平凡社.
鈴木晶『ニジンスキー 神の道化』新書館, 1998.
Ed. Cohen, S., Dorris, G., Goldner, N., Gordon, B., Reynolds, N., Vaughan, D. & Youngerman, S. (2004) *International Encyclopedia of Dance*, London: Oxford University Press.
Garafola, L. (1998) *Diaghilev's Ballets Russes*, Cambridge (U.S.A): Da Capo Press.
Guest, A. H. (1989) *Choreo-Graphics: A Comparison of Dance Notation Systems from the Fifteenth Century to the Present*, London: Gordon and Breach.
McGinness, J. R. (1996) *Playing with Debussy's Jeux: Music and Modernism*, Santa Barbara: University of California (Ph.D. thesis)
——— (2005) "Vaslav Nijinsky's Notes for *Jeux*" in *The Musical Quarterly*, 88(4), London: Oxford University Press.
Nijinsky, V. (1995) *Cahiers: Le sentiment*, Paris: Actes Sud. (ヴァーツラフ・ニジンスキー (鈴木晶訳) (2013) 『ニジンスキーの手記 完全版』新書館.)
Bibliothèque nationale de France (<http://www.bnf.fr/fr/acc/x.accueil.html>)
New York Public Library (<https://www.nypl.org/>)

さとう まちこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

佐藤真知子さんは、舞踊史上偉大な舞踊家の一人として知られるヴァーツラフ・ニジンスキーの、振付家としての側面に着目して研究を行っている。ニジンスキーは 20 世紀初頭に西欧で一大ブームを巻き起こしたロシアバレエ団の花形男性舞踊手であったが、近年、振付家としての功績も再評価が進んでいる。しかしながら、ニジンスキー自身がどのような意図でこれらの作品を創作したのか、その振付で何を表現しようとしたのかという点は、これまでほとんど検討されてこなかった。

今回の資料収集を目的とする海外調査研究は、博士論文の基盤となる大変重要な調査であった。訪問したフランス国会図書館、ニューヨーク公立図書館の両機関は、ニジンスキーに関する貴重な資料を多く所蔵している。今回、ニジンスキーの手記やインタビュー記事をはじめとする資料の検討をなし得たことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと言える。さらにこの研究を進め、深化させることで、ニジンスキーの舞踊思想を明らかにできるのではないかと期待している。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (人文科学系)・猪崎 弥生)

Acquisition of materials on Vaslav Nijinsky and his productions

Machiko SATO

The aim of this short study trip was the acquisition of materials on Nijinsky and his productions.

Vaslav Nijinsky [1889-1950] is a Russian dancer and choreographer in the early 20th century, and he was known as a member of Diaghilev's Ballets Russes. He choreographed four ballets: *L'Après-midi d'un Faune* (1912), *Jeux* (1913), *Le Sacre du printemps* (1913) and *Till Eulenspiegel* (1916). His choreographies were criticized and evaluated as controversial works. However, his view on dance has not been researched yet. In order to investigate his view on dance, I collected materials on Nijinsky's interviews, writings and his works industry.

I visited Bibliothèque National de Française (France National Library) in Paris and Performing Arts Center of New York Public Library in New York. Based on these materials, I plan to clarify Nijinsky's choreographic view in my doctoral thesis, and identify his contribution to the development of choreography and ballet culture today.